# 2人だけの秘密は一種のプレイのようなもの

## ——壇蜜

## 「女性同士でも、旦那さんやパートナーと一緒でも、どちらでも楽しめる映画ですね」

だんみつ　1980年、秋田県生まれ。和菓子店、葬儀社などで働いた後、芸能界デビュー。調理師免許、日本舞踊師範の資格も持つ。現在はタレント、女優、エッセイスト、コメンテーターなど、幅広く活躍中。9月公開予定の映画『食べる女』に出演。

**英国ファッション界に君臨する天才的な仕立て屋と、彼のミューズとして工房に迎え入れられたウェイトレス。巨匠ポール・トーマス・アンダーソン監督が究極の愛を描く『ファントム・スレッド』が、5月26日（土）から全国公開される。全ての想像を超えた〝愛〟とは―？　壇蜜さんに語ってもらった。**

### 「秘密の愛のかたち」は愛情のリセットボタン

恋愛映画というより、どちらかというと、主人公2人の愛情のかけ方、かけられ方が変わっていく姿……2人の愛情の観察をしているような感覚でした。

仕立て屋のレイノルズは完璧主義で、独身主義。それが、若いウェイトレス、アルマと出会い、自分の洋服のモデルとして、自宅兼工房に招き入れます。

男は職人の世界によくいるタイプ。顧客ひとりひとりの要望に応えながら、作品を作り続けていくわけですから、自分の中にしっかりした芯がなければ出来ません。流行に流されず、世界が変わっても、自分だけは変わらないような人間です。でも、アルマは自分なら、彼を変えられるかもしれないと思う。血気盛んな若い女性は、そう思いがちなんです。みんな1回くらいはトライしますが、おそらく、誰も成功しません。私も若い頃、「未遂」くらいはありましたが、やはり諦めました。

だけどアルマは微量の毒を盛り込み、やがて2人は「ある秘密の愛のかたち」を発見します。もうこれしかない、というようなものを。それはある意味、プレイでもあります。大人は、自分を変えるなんて冒険は、そんなにできるものではありません。それに、愛情をかけると言いますが、そもそも愛情って何だろうと思う。けれど「ある方法」は、出会ったときの初々しい気持ちを2人に思い出させ、リセットする。その2人だけの秘密は、愛情のスイッチなのかもしれませんね。

用法容量を守れば、毒も薬になりますから。映画を見て、2人だけの「毒」を見つけてほしいなと思います。

### レイノルズと工房を変えていく彼女の存在

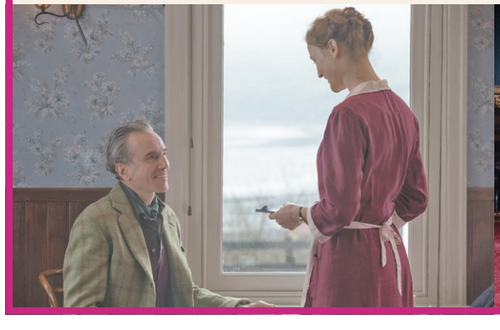
誰からも認めてもらえず、お客さんからチップをもらって生きていたウェイトレスが、仕立て屋に見初められ、モデルになって、だんだんと完熟していく姿は、エロチックでした。見られているという自信がついていったんでしょう。

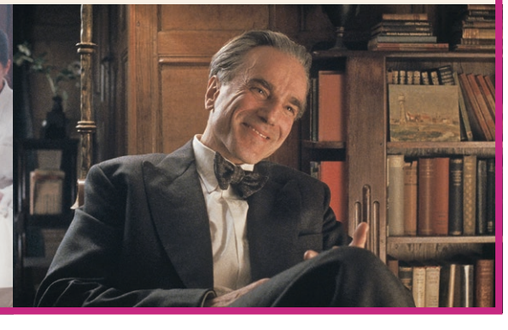
そしてあの、仕立て屋の自宅兼工房が、一つの小宇宙のようでした。みんなが階段を上り下りする場面が、何度も繰り返されます。そのたびに、登場人物たちの気持ちが変わっていく。工房で働く人々の場面は、ドキュメンタリーみたいでした。上流階級の華美なファッションも描かれますが、むしろ工房で働いている人たちの服装がビシッとしていて、地味なワンピースがとてもチャーミング。目立たないこともかわいらしさなんだ、と思いました。

自宅兼工房は、時にはファッションショーのステージとなり、時には日常生活の場となる。日常と非日常が一つの場所で繰り広げられる商家は、初めて見る世界でした。小さな世界がきちんと描かれているからこそ、舞台となった1950年代のロンドンにも、その頃のファッションにも明るくない私でも、工房の外の世界や、その時代が、生き生きと想像できました。

映画の最後はむしろ「序章」という感じ。変われないレイノルズと工房の小宇宙の、変化の始まり。それは時代の変化の象徴のようにも思えました。

配給：ビターズ・エンド／パルコ　© 2017 Phantom Thread, LLC All Rights Reserved



### STORY

1950年代のロンドン。トップデザイナーとして君臨するレイノルズ（ダニエル・デイ＝ルイス）は、ウェイトレスのアルマ（ヴィッキー・クリープス）と出会い、理想のモデルとして自分の工房に招き入れる。だが、アルマの存在はレイノルズの完璧な生活を乱し始め、2人の愛は狂気の淵へと落ちていく……。